

生涯学習情報誌

Life Learning

12 2019
Dec.
NO.352



生涯学習開発財団

祝

2019年5月 東京大学博士号(学際情報学)取得

高木紀久子さん(取得時59歳)

【論文テーマ】現代美術家による作品コンセプトの生成プロセスの解明

アーティストに「神様が降りる」メカニズムを科学してみた

■空からアイデアが降ってくる訳がない

高木紀久子さんは多摩美術大学出身。アーティスト活動と並行して、専門学校でデザインを教えてきた。多くのアーティストは、次の作品に対してがき苦しんでいる中、急に光が見え、そこからスィスイと創造的な新作ができあがってしまう、そんな経験をしている。「神が降りた」と表現する者もある。創作の課題に取り組む学生たちも同様だ。一部の天才だけにあるスィッチではない。ましてや空からアイデアが降ってくる訳はない。そのメカニズムを知りたかったが学術的資料はなく、高木さん自身が研究することになった。門を叩いたのは、科学と芸術を認知科学の領域で扱う東京大学学際情報学府の岡田猛教授。入試面接では「非常に面白い反面、捉えにくいことをやろうとしている」と言われた。

■「ずらしが想定外のずれを生む」

アーティストの内的なものをどう捉えるか。現代美術作家の篠原猛史さんが、東大の駒場美術博物館で展覧会をやった際の、企画から展示まで約10か月、13回に渡るインタビューが研究室にあった。全く別の研究のために録られたものだったが、独特の表現や用語がネックとなり、お蔵入りになっていたものだ。それが、同じアーティストとしての立ち位置から読める高木さんには宝の山だった。なぜこういう言い方になるのか、手にとるようにわかった。その内面で起きていることも非常に面白かった。「気づきや発見は、突然神様が教えてくれるものではなく、プロセスを経て漸進的に進むのです。一

般の人がご飯のおかずを考えるとときに使う認知プロセスを使っています。それと、岡田教授が発表した『類推的ずらし』。新しいものを作ろうと既存のやり方の一部を変更する認知プロセスですが、私は『ずらしがずれを伴う』ということ、修士課程の1本目の論文の中で主張しました。想定外の、偶然生じたずれが新しい発見につながるということです。毎日の小さなずれが、ある日、はっと気がつく大きなずれを生じ、それを見て驚く。一般人はその驚きを失敗と解釈しやすいが、アーティストやデザイナーはそれをうまく利用します」

■最初の論文が後押ししてくれた

苦勞したのは、それを認知科学としての方法論で明らかにし、発見を証明すること。心理学や統計に関しては大学院の授業だけでは間に合わず、1、2



現在準備中の(GLLC博士の会)の幹事会にも出席。「参加者にも財団にも宝物になるのではと期待しています」

年生の授業もとって基礎からやり直した。仕事をしながらの論文は時間的には厳しかったが、1本目の論文が後押ししてくれた。その論文は、テーマの新規性からあちこちで引用され、国内外の学会からリアクションをもらった。それが自信になり、中途半端で終わらせられない理由にもなった。

■知見を活かせるポジションに

修士課程も入れて博士号取得まで足掛け8年かかったが、それには理由がある。2017年、東大で初めて芸術関係の実践的な授業や連携研究を行う、東京大学芸術創造連携研究機構の開設に向けて準備が始まった。機構のスローガンは「アートで知性を拡張し、社会の未来を開く」。科学的研究においてイノベーションを起こすためのヒントや基軸が、アートにあると考える7つの研究科が、文理横断で取り組むことになった。高木さんは、仕上げ直前の博士論文を棚上げして単位満期退学、機構の運営者兼特任教員として就任した。2年後の今年5月、博士号取得と機構のスタートはほぼ同時だった。

「一般の人も日常使っているプロセスなので、ぜひ創作をしながらビジネスや研究にも生かしてほしいです。また美大卒業後も頑張って作家活動が続いている方たちに、そういうプロセスがあることを知ってもらい、創作支援につながればと思います。」

松田妙子先生がそうだったように、研究の間では年齢は関係なかったです。むしろ、何のために自分が大学にいるのか明確なところが、財団の支援対象になる社会人学生には強みになりますよ」

十七絃箏

Jushichigen-Soh



十七絃箏は、「春の海」を作曲したことでも有名な箏曲家の宮城道雄が、合奏の低音部を担当する楽器として、1921年（大正10年）頃に考案したもの。クラシックのファンだった宮城道雄が、箏の音楽にハーモニーを求めたことが発想の契機と言われている。

十三絃では5音階が標準だったが、十七絃では洋楽と同じ7音階用に考案されており、現在では多くの奏者に使われている。十七絃を専門にするといった慣習はなく、楽曲や編成に応じて使いわけられる場合が多い。現在は、ベース的役割以外にも表現の幅を広げ、独奏曲やコンチェルト、低音だけのアンサンブルも作られるなど、さまざまな演奏シーンで活躍している。

十三絃が長さ180cm、幅25cmに対し、十七絃は長さ210cm、幅35cmと大きい。絃は絹または合成繊維だが、音域によって違う太さのものを使い、低音のため十三絃の絃よりも太めで、爪も厚めのものが使われることが多い。大きさや絃の数以外で十三絃箏と大きく違っているのは、右手側の絃の留め方。十三絃は心座と言われる穴に絃を通し、箏の裏側で結んで留める。十七絃は龍額または龍頭にネジで巻いて留めているため、琴柱の位置だけでなく、ネジの締め方でも音の高さを変えることができる。

宮城道雄は同時期、80本も絃がある大型の八十絃箏や、短箏なども考案したが、十七絃以外は普及しなかった。

奏者に聴いたその魅力

山野安珠美

Yamano Azumi



山口県出身。沢井忠夫、沢井一恵両氏に師事。沢井箏曲院教師、山口芸術短期大学非常勤講師。2003年第9回長谷校記念全国邦楽コンクール優秀賞。2007年平成19年度山口県芸術文化振興奨励賞各賞を受賞。東京・山口でのソロ活動を中心に、グループ参加や、洋楽器等の様々なアーティストとの共演。ロシア「エルミタージュ美術館音楽祭」にて、ソリストとしてオーケストラと共演など、海外公演も多数。

母が箏をやっていたことがきっかけで、私も始めました。子供の頃はピアノだったのですが、中学生の時に箏曲家の沢井忠夫先生と出会い、本格的に箏を学ぼうと決心しました。

● 十七絃箏の魅力は？

十七絃箏は、十三絃箏には出せない低音を出せるのが魅力で、ハーモニを作る際のベース的な役割を果たします。

箏は、指でも爪でも弾けて、爪の場合は表、裏横など付け方を変えることで、同じドの音でも10種類以上の音色を出すことができます。その使い分けで音楽が作られていくので、他の楽器に比べても曲やシチュエーションごとに音色の見え方が違う、多彩な楽器だと思います。音の余韻も大好きで、箏ならではの感じています。

最近、私たちの古典の演奏を聴いた海外の方から「ロックっぽいね」とよく言われます。古典は江戸時代の作品ですが、リズムも音色の使い方も新鮮で、AUN Jで現代的な曲を演奏しながら、古典に回歸する感覚になることがあります。

若い頃は西洋音楽を

箏でどこまで再現できるか、他の楽器の中で箏が負けないことを考えていました。現在では、100人で演奏するオーケストラの世界を、箏一人どう表現できるかと考え、あえて音を減らしたり、余韻を楽しむ箇所をつくったりと、案外それは古典の演奏に近寄っているかもしれません。

現代の音楽につながる

古典作品は、三味線と歌、そこに箏が入った形です。桜や男女の話、名物など、時代時代の面白い情景を音楽の中に取り入れていく、こうした作業は昔も今も同じだと思います。そして、宮城道雄先生が十七絃を作られたように、ときどき革命児が現れ、そうした伝統と進化の上に今ここに至ります。私たちに何ができるのか、今を生きている箏というところで、自分たちならできる音楽ができたかなと思っています。

● AUN 公演情報

徹底的にAUN J！

会場：浅草花劇場（東京都台東区浅草2-28-1）
日時：12月28日（土） 開場14時30分／開演15時
料金：全席指定 6,000円（税込／入場時にドリンク代別途500円）
※3歳未満は、保護者膝上に限り入場無料。
特典：公演当日に限り遊園地「花やしき」の入場が無料となります。

AUN J クラシック・オーケストラ CONCERT 2020

1月16日（休） 18：30開演 岡崎市民会館 あおいホール
1月17日（金） 18：30開演 長良川国際会議場メインホール
1月18日（土） 14：00開演 一宮市民会館
1月19日（日） 14：00開演 アイプラザ豊橋

詳細：http://www.aunj.jp/jpn/livedisc/liveinfo/schedule.html

● 監修者：AUNプロフィール

井上公平・井上良平。1969年大阪にて5人兄弟の末の双子として生まれる。1988年、和太鼓集団・鬼太鼓座（おんどこざ）に出会い、高校卒業と同時に入座。2000年に「AUN」として独立。2009年、邦楽界で活躍する若手を集めて「AUN-J クラシック・オーケストラ」を結成。公演回数は国内外で1400回以上。子どもたちに日本文化の魅力を伝えるため、全国の小学校を訪問し、和楽器演奏と桜を植える活動もしている。



♪音を聴いてみよう！

生涯学習開発財団のWEBサイトで、十七絃箏の音色が聴けます。

http://www.gllc.or.jp/

または、左のQRコードからどうぞ。

ようこそ！
和楽器の世界へ

